

路地における鉢植えの小さな緑の可能性と課題

佛教大学 正会員 ○水上 象吾

1. 研究の背景と目的

都市において緑化は重要な環境政策と考えられているが、緑地の確保は困難である。都市の土地利用の多くは住宅が占め、公園・緑地等の公共の場において緑を確保するにも限界がある。以上の問題意識の下、本研究では可動性の緑被空間を構成する緑として、土地利用に制約されにくい鉢植え・ポットの緑に着目する。路地において住戸の表に設置された植木鉢を調べ、地域や緑に関する住民意識との関係を分析する。鉢植えの現状と緑化の可能性を検討すると共に、課題点についても検討する。

2. 研究の方法

2.1 路地の鉢植えの実態調査と住民の意識調査

京都市中心市街地を対象に126の路地を選定し、住戸の表に置かれた植木鉢数を目視によりカウントした。対象とした路地は平均距離が32m、最短で8m、最長で83mであった。路地ごとに集計し、路地の距離にて除算し1mあたりの植木鉢数を算出した。

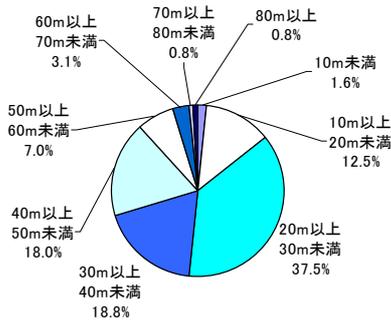


図1 調査対象の路地の長さ

鉢植えの実態調査を行った路地に接する住戸1000軒を対象にアンケート調査を実施し、路地環境や緑に関する住民意識を把握した。有効回収数は278票(有効回答率27.8%)となった。

2.2 分析方法

路地における植木鉢数とアンケート調査による住民意識との関係を分析した。統計的分析としては相関分析、カイ二乗検定により分析した。有意水準の表示は** $P < .01$, * $P < .05$ とし、数値は関係の強さを表す相関係数RとCramerのV係数である。

3. 分析結果

3.1 鉢植えの設置状況と管理の負担

住戸の表に置かれた植木鉢数は、126の路地を対象と

した調査により総数13464鉢が確認された。一つの路地にて平均105.2個、路地1mあたりの平均個数は3.28個となった。路地の進行方向が東西方向の場合で平均3.39個/m、南北方向の場合で平均3.26個/mと差はない。

アンケート調査より自宅前においた鉢植え数について4択の回答を得た。「置いていない」の回答は17.8%、「一〜三鉢」は20.3%、「四〜九鉢」は35.7%、「十鉢以上」は26.1%となっている。

つぎに、緑の維持管理の負担感を検討する。自宅の緑量について居住者の多少感と緑の手入れの頻度、手入れの負担感を4択の選択肢にて尋ねた。項目間の関係を相関分析にて調べたところ有意な関係が認められ、緑量が多い人ほどよく手入れをする傾向がみられ($R = .303^{**}$)、緑量が多いほど手入れの負担感も大きいことが示された($R = .253^{**}$)。

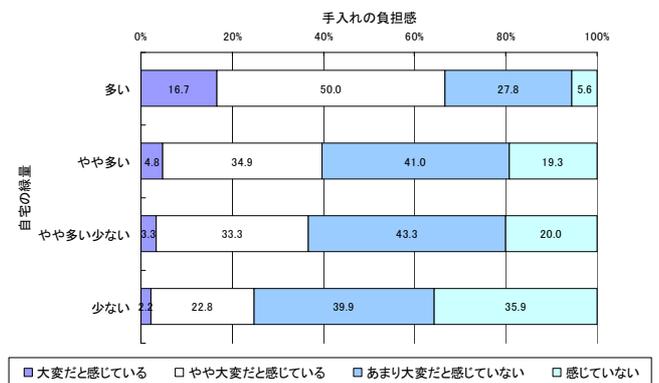


図2 自宅の緑量と手入れの負担感との関係

同様に自宅前においた鉢植え数と、手入れの頻度、手入れの負担感との関係を調べた。結果、鉢植えが多い人ほどよく手入れをする傾向がみられた($R = .259^{**}$)。

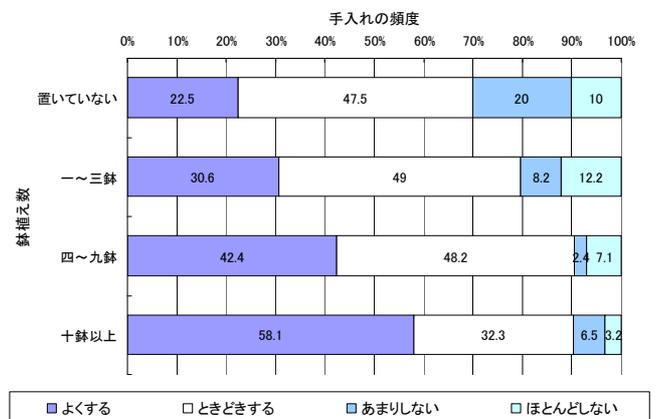


図3 自宅前の鉢植え数と緑の手入れ頻度との関係

キーワード：鉢植え、緑化、路地、手入れ

連絡先：〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96 佛教大学

しかし、鉢植え数と手入れの負担感との間には有意な関係は認められず、鉢植えが多くてもそれほど負担に結びつかないと考えられた。ただし、鉢植えを多く所持する人の自宅は緑量も多い傾向がみられるため (R=.213**), 鉢植え数と手入れの頻度とは緑量を通じて間接的にかかわっていると考えられる。そこで、緑量を制御変数とした偏相関分析を行った。その結果、鉢植え数と手入れの頻度とは相関関係が認められ (R=.211**), 緑量にかかわらず鉢植えを多く持つ人は緑の手入れの頻度も高いことが示された。

近所における草花や苗木などの緑の授受の有無については、2/3 程度の人が経験有りとの回答を示した。自宅前の鉢植え数との間にはカイ二乗検定の結果、有意差が認められ (V=.259**), 授受の経験がある人ほど鉢数も多い傾向がみられた。



図4 近所での草花や苗木などの緑の授受経験

3. 2 鉢植えの緑の課題

鉢植えの緑の好ましくない点としては、具体的な項目として虫害の発生、見通しや通行の障害、景観の悪化等があげられる。住民の回答は図5に示す通りである。

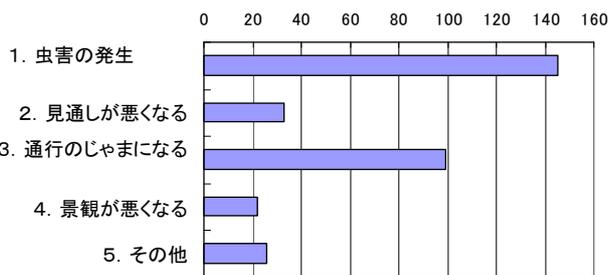


図5 鉢植えの緑の好ましくない点

(1) 防犯性とのかわり

植木鉢の大きさや形状は多様だが、直径20cm程度の鉢が多く観察されており、鉢植えの緑の存在が直接、路地の見通しを悪化させる場合は多くはないと考えられる。ただし、路地では植木鉢を含む、自転車・バイクや居住者の私有物のあふれ出し物が多く観察されるため、物陰がでることが防犯上の不安感につながる可能性もある。

夜間の自宅前の路地に関する防犯上の不安感については、図6に示す結果となっている。個人属性による差異を検討したところ、性別による有意差が示され

(V=.212*)、女性の方が不安との傾向の回答が多い。

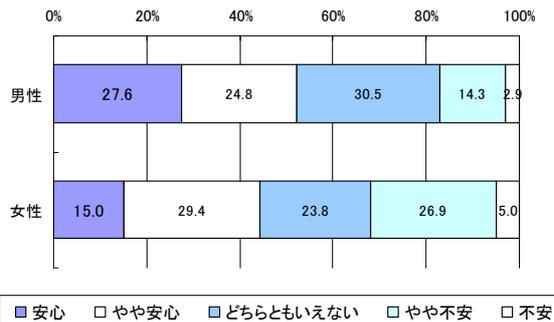


図6 路地の防犯上の不安感と性別

防犯上の不安感と路地ごとの植木鉢数との間に有意な関係は示されなかった。既存研究では、地域のコミュニティが高いほど地域の安心感が高められるとの研究結果も示されている¹⁾。路地の鉢植えの緑へ水やりや手入れを行う機会の増加は、近所づきあいの頻度を増やす可能性があり、緑や花を通じた会話は地域コミュニティを深める可能性がある²⁾。

(2) 維持管理の必要性

鉢植えの緑の好ましくない点の最も多い回答は、「虫害の発生」であったが、この要因や解決策は緑に対する手入れに関係すると考えられる。その他を選択し内容を記述した回答は25あり、手入れ、掃除や管理等にふれた回答は16にのぼる。したがって、緑の維持管理は鉢植えの緑の課題に関して大きな要因となり得ると同時に、好ましくない点の解決策にもなり得ると考えられる。

4. まとめ

以上より、鉢植えという可動性の緑は土地利用形態や地盤の種類に左右されず多様な場所に設置できる可能性がある。また、鉢植えの緑はこまめな手入れが必要になるものの、庭木等に比べ手入れの負担感は大きくないと考えられる。近所における草花や苗木などの緑のおすわけにより、緑そのものの育成や配布を促すことが可能と考えられる。一方、鉢植えの緑の存在は、路地の見通しや通行を障害するといった課題もある。しかし、鉢植えそのものはそれほど大きくないことから設置場所に配慮したり維持管理を怠らないことで、問題点の要因にはなり得にくいと考えられる。鉢植えの緑の手入れのため路地に出る機会が増えることは、地域への監視の目が行き届き防犯性を高める可能性もある。

参考文献

1) 小林秀樹『集住のなわばり学』彰国社, 1992年, 260p.
 2) 水上象吾 (2015) 「住戸の表に設置される鉢植えが多すぎる場合のシグナラー住民の地域コミュニティとの関係を測る指標となり得るか」土木学会第70回年次学術講演会 IV-006, pp.11-12